

氏名（本籍）	高 揚（中国）
学 位 の 種 類	博士（日本語教育学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 9665 号
学位授与年月日	令和 2 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	依頼に対する「断り」の言語行動に関する日中対照研究 －「配慮」の示し方の観点から－
主 査	筑波大学 教 授 博士（言語学） 小野 正樹
副 査	筑波大学 准教授 博士（言語学） ルート ヴァンバーレン
副 査	筑波大学 准教授 博士（言語学） 関崎 博紀

論 文 の 要 旨

本研究は、日本語と中国語（以下、日中）の「依頼」に対する「断り」の言語行動の特徴と相違点を、ポライトネス研究の観点から、日本語母語話者と中国語母語話者の「配慮」の示し方、及びその背後にある「配慮」のメカニズムについて述べたものである。言語と文化により、「依頼」や「断り」は会話参与者間の人間関係によりしやすさ・しにくさが異なり、会話の参与者間の慣習的・日常的な人間関係を維持する言語コミュニケーションの方略を、意識面と行動面の「配慮」から分析している。「配慮」の分析方法として、日中の母語話者に紙面調査、談話完成テスト、コーパスとして公開されているロールプレイデータのデータを利用し、語用論のポライトネス研究、認知言語学の事態解釈、社会言語学の文化コンテキストなどの観点から、日中の異なりを主張している。論文の構成は、第1章は研究背景と研究目的について、先行研究を概観しながら述べ、第2章はポライトネス理論（Brown and Levinson 1987 以下 B&L 1987）、認知言語学、相互行為的社会言語学の理論と研究方法の説明を行い、第3章から第6章では4つの研究課題に取り組んでいる。第7章が全体のまとめとなっている。

課題1：日中両言語の断り発話を比較し、断られる側の視点から、日本語母語話者（JNS）と中国語母語話者（CNS）にとって、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネス（B&L 1987）の断り方ではどちらが受け入れやすいかという、ポライトネス研究としての「断り」に関する日中母語話者の意識の違いを追究する。

課題1に対して、第3章では、断る側と断られる側の日中の意識の異なりについて、意味公式を分析単位として論じている。Langacker (2008) の「事態解釈(Construal)」というアプローチに注目し、JNS は「スキーマ化」という<事態解釈>を用いて、断りの理由を簡潔にする傾向があるのに対し、CNS は「精緻化」という<事態解釈>を利用し、事例を挙げつつ断りの理由を詳細に述べる傾向がある。さらに、CNS の断る側は、実質的な「埋め合わせ」行動を積極的に提案し、他者から評価されたい、よく思われたい、認められたい、尊敬

されたいという相手のポジティブ・フェイスに働きかけるストラテジーを好み、意味公式「代案提示」を使用するが、JNS の断る側は、他者から邪魔されたくない、自分の領域に入ってきてもらいたくないというという欲求に配慮したネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを好む傾向があることから、相手に気を使わずに一定の距離を保ち「近づかない」よう、意味公式の一つである「条件」が日本語にとっては配慮であると主張している。

課題 2：断る側の JNS と中国人日本語学習者(CJL)における、再依頼から合意形成に至る「断り」談話の展開構造を明らかにし、展開構造に違いがある場合には、その要因を人間関係構築の角度から明らかにする。

課題 2 に対して、第 4 章では、一度の依頼で発話が終わることよりも、断られても再度依頼することが日中両言語の現実会話に多く、コミュニケーションの特徴がよりはっきり現れることに注目し、依頼後の再依頼から合意形成に至るまでの談話展開分析を行っている。JNS は依頼側の「代案提示」による合意形成の場合が多く、その「代案提示」の内容は、あくまでもその発話の場にいる登場人物に再依頼を行い、その際にも日本語の近づかない「配慮」と結びついているのに対して、CJL では断る側の「代案提示」による合意形成が多く、かつ、その「代案提示」の内容も自分と親密な関係にある身内や友人などの第三の人物にも言及して、より依頼内容を実現できるような「配慮」を示し、自己意志と互惠関係が優先されることが、近づくという「配慮」の反映であると述べている。

課題 3：話題上の話し手・聞き手の役割交替の様相の分析を通して、日本語と中国語の依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルの特徴を探る。また、談話展開のスタイルの違いには日本語母語話者と中国語母語話者のどのような心理的欲求が反映されているかを明らかにする。

課題 3 に対して、第 5 章では、依頼に対する「断り」の談話展開のスタイルについて、「働きかけ型」、「非働き型」、「目的達成型」、「対人配慮型」として定義し、談話を量的、質的に分析している。JNS では断る側が「協調的役割回帰型」「一時競合的役割回帰型」の談話を展開することが「配慮」の示し方である。「協調的役割回帰型」とは、局所的な話し手・聞き手役割の交替が見られるものの、最終的に元の話し手・聞き手の役割に戻り、且つ相手の役割変更に合わせて自らの役割を調整する方法で、「一時競合的役割回帰型」とは、片方の参加者が聞き手から話し手へ、または話し手から聞き手へと役割を切り替えたとしても、もう一方の参加者は相手に合わせて役割を切り替える動きが見られず、役割交渉のやりとりを経て、最終的にはまた元の話し手・聞き手役割に戻るパターンである。一方の CNS では「話し手役割競合型」の談話展開が多く見られる。「話し手役割競合型」とは、会話の参加者の双方が、一定数以上相手の話し手役割の発話を受けても引き続き話し手として振る舞い続けるパターンで、断る側の自己志向を優先することが「配慮」の示し方である。

課題 4：依頼に対する「断り」の談話が展開していくプロセスの中で、相手と円滑にコミュニケーションを取るための配慮言語行動がそれぞれどのような言語表現、あるいはストラテジーによって表現されるか、さらに、こうした配慮言語行動はどのような文化コンテキストを反映するかを明らかにする。

Hall(1976)他の文化論で強い主張がされてきた高コンテキスト・低コンテキスト論を踏まえ、課題 4 に対して、第 6 章では、JNS が好む「察し合い」は高コンテキスト文化が反映された「配慮」を示す言語行動で、人間関係維持の優先が反映されているのに対して、CNS は「話し合い」を好む傾向があり、意思伝達を優先

することが「配慮」で、低コンテクスト文化が反映された「配慮」の示し方であると結論づけている。

第7章では、本研究の意義を強調し、「断り」の言語行動を通じて、「配慮」という人間の意識と言語の普遍性と同時に、日中両言語で原理の異なりをまとめ、今後の課題を述べている。「断り」の言語行動に関する従来の研究とは異なり、断る側のみならず、断られる側からの研究の必要性について論じている。

審 査 の 要 旨

1 批評

日中両言語のコミュニケーションの異なりを、「配慮」というポライトネス研究の観点から、「依頼」と「断り」という聴者のフェイス（面目）を脅かす性質が強い発話行為に注目し、本研究以前の先行研究をしっかりとまとめ、まだ明らかになっていない課題を絞り込むことに成功している。その結果が、「依頼」「断り」の一回きりのやりとりではなく、その後に起こる「再依頼」というコミュニケーションで、「再依頼」の行い方に、日中のコミュニケーションの大きな異なりがあることを追究した点に、高氏のオリジナリティが発揮されている。

分析方法は、言語表現を意味公式レベルで分析する伝統的手法を用いて、談話をミクロ的に丁寧に観察している。さらに、談話をストラテジーの観点から分析し、人間関係の捉え方と強く結びついていることを主張し、文化のコンテクストレベルまでの幅広い視点で論じている点は、先行研究の手法をしっかりと読み込んだ成果である。さらに、日本語では対人関係に留意した表現が多いのに対して、中国語では事態に対する表現内容を精緻化することが相手への配慮に繋がるという主張は、談話分析研究のみならず、日中で受け入れやすい断り方を、断られる側の意識の分析にも踏み込んでいる点で、社会への実用的な研究となっている。

本論のキーワードとなっている「配慮」という用語は、先行研究でも多く用いられてきたが、高氏の主張により、「配慮」が対人関係において、どの言語にも普遍的であっても、言語表現として見た場合に異なっているという指摘は明確となり、日常的で慣習的な「配慮」という意識・言語行動表現が、新たなポライトネス理論の一方向となることを示唆している。

ただし、本研究の前提となっている日中言語の摩擦が、「依頼」と「断り」において具体的にどのように起きているか、「上下関係」と「互惠関係」といった人間関係がどのように影響しているのかについては、さらに踏み込んだ論を求めたい。「人間関係維持」という用語についてもまだ曖昧さがあるが、こうした問題点については、高氏自身も十分自覚しており、これからの発展的な研究を通じて解決していくものであり、本論文の学術的価値を損なうものではない。

2 最終試験

令和2年7月14日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審査の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（日本語教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。